

船井情報科学振興財団 報告書

織井理咲

University of Washington
Paul G. Allen School of Computer Science & Engineering

2025 年 12 月

University of Washington Paul G. Allen School of Computer Science & Engineering の博士課程の 5 年目の秋学期を振り返ります。

I. フィールドワーク in ケニア

2024 年 12 月の General Exam（卒論の提案書）で発表した研究を実施するため、2025 年 3 月から 4 月にかけて、約 1 年ぶりにケニアを訪問しました。本研究は、昨年から継続して取り組んでいる、ケニアの若い女性を対象とした避妊法の選択支援アプリ開発プロジェクトの延長にあたります。昨年開発したアプリの有効性をさらに高める手段として、AI（チャットボット）の活用可能性について検討しました。今後、チャットボットをアプリに導入する際に必要となるデザイン上の考慮事項を明確にするため、現地の若い女性を対象に、チャットボットのアイデア創出を目的とした参加型デザインワークショップを開催しました。現在、論文を HCI のジャーナルに提出する準備を進めています。

このケニアのプロジェクトに加わってから約 2 年が経ちましたが、フィールドワークや医療の専門家との共同研究など、非常に貴重な経験を積むことができました。発展途上国という文脈ならではのユニークな課題があり、限られたリソースやさまざまな制約の中で技術をデザイン・開発・導入していくことの難しさを改めて実感しています。ヘルスとコンピューターサイエンスの間に立ち、両分野の視点を行き来しながら、実際の現場に根ざした技術を形にしていくことの重要性を学びました。

II. 夏のインターンシップ

6 月から 9 月まで、OMRON SINIC X Corporation（東京）にて研究インターンシップに参加しました。ピアサポートにおけるコミュニケーションの中で、AI が果たす役割について研究を行いました。本プロジェクトは、東京大学および京都大学の研究者との共同研究であり、デジタルヘルス、メンタルヘルス、AI、HCI など、多様な分野の専門性が集まる刺激的な環境でした。AI や LLM を用いた技術開発や実験は初めての経

験でしたが、タイムリーなテーマであったこともあり、新しいスキルや視点を身につけることができましたと感じています。現在、論文を HCI のジャーナルに提出する準備を進めています。

日本の企業でインターンをするのは初めてでしたが、研究テーマを比較的自由に設定でき、自分の興味のあるトピックに沿って研究を進めることができました。また、素晴らしいメンターの方々に恵まれ、手厚いサポートのもとで研究に取り組むことができました。



III. 卒業論文の執筆

論文の執筆と並行して、卒業論文の執筆も進めています。General Exam は卒業論文の提案にあたるものであったため、基本的な土台はすでに整っていますが、新しいプロジェクトの追加や、研究全体のストーリー性をさらに磨く必要があります。これまでに執筆した論文を振り返りながら、各プロジェクトがどのように結びついているのか、また全体としてどのような主張（アーギュメント）を提示できるのかに焦点を当て、卒業論文の執筆に取り組んでいます。

IV. 就職活動

2026 年 6 月に卒業予定のため、就職活動を開始しました。進路については、アカデミック、企業、国際機関などに幅広く挑戦することを決めています。最終的には、人間中心のデジタルヘルスの開発に携わり、グローバルなスケールでの取り組みに関わりたいと考えています。

V. 最後に

いつもご支援ありがとうございます。博士課程もいよいよ最終段階を迎え、就職活動を進める中で、多くの先輩方や同期の皆様からご支援をいただいております。心より感謝しております。最後まで充実した研究生活を送れるよう、引き続き精一杯取り組んでまいります。